

Close Up

クローズアップ 交通教育センター

大型トレーラーの特性と安全運転に必要なポイントを理解してもらう

3月10日、ヤマトボックスチャーター（株）の安全運転研修が交通教育センターレインボー熊本（以下、レインボー熊本）で実施された。同社はヤマトグループの幹線輸送（物流拠点間の輸送）を担う企業で、昨年6月から九州地区および山口県・広島県の事業所で大型トレーラー（セミトレーラー）を運転するドライバーを対象にこの研修を開始した。同社九州統括支店マネージャー 栗野和文さんは「大型トレーラーの場合、事業所内での実技指導には限界があるため、より実践的な安全運転教育をしたいと考えていました。レインボー熊本には広大なトレーニングコースがあり、当社の要望に合わせて指導内容を提案していただけたので、研修を始めることにしたのです。毎月1〜2回実施し、対象者全員に受講してもらうことをめざしています」と話す。



トラクターとトレーラーの連結・切り離しの手順を確認

研修は半日（すべて実技）となっており、この日は4名が受講。大型トレーラーは荷物を積載するトレーラーと、それを牽引するトラクターで構成されている。トレーラーの連結や切り離しの際に事故を起こすことがあるため、インストラクターが実車で安全に行う手順を受講者に示す。さらに大型トレーラーの特性として、交差点などを曲がる際にトラクターの右前方の角とトレーラーの右前方の角が通る軌跡などを確認してもらう。

この後、受講者が大型トレーラーを運転して、指定されたコースを走行。ハンドルをきっていくと、トラクターとトレーラーの連結部で車体が折れ曲がるということを考慮しなければならぬ。コースの途中に設けられた交差点を左折する場面では、曲がった先の対向車線の右折レーンに停止線を越えてクルマが止まっているという想定で、このクルマと接触



交差点の停止線を越えた先に停車しているクルマを避けて左折を完了するという課題



トラクターの右前方の角とトレーラーの右前方の角が通る軌跡を赤と青のマーカーで示す

しないように左折を完了するという課題に取り組む。

「交差点内にいるクルマを避けながら左折していくのは難しいことがわかったと思います。このような時は、左折を始めずにそのクルマがいなくなるまで待つほうが安全です。そのためにも事前に交差点内の状況をしっかりと把握してください」とインストラクターがアドバイスした。「プロドライバーの中でも非常に大きな車両を運転していることから、確実な状況判断が必要です。安全運行をコントロー

ルできるような運転を心がけましょう」。

これから大型トレーラーの運転を始めるといふ受講者は「知らないことだらけでしたが、体験しながら学べたので、運転特性や注意すべきことがよく理解できました」といふ。一方、大型トレーラーを運転して5年になるという受講者は「これまでの運転が自己流だったことに気づくことができました。安全運転に必要な技術や意識を教えていただき、とても良い機会になったと思います」と感想を語った。



車庫入れの際も連結部で折れ曲がることを考慮して後退する

安全かつ確実に現場へ到着するための緊急走行を身につける研修

鈴鹿サーキット交通教育センターは、消防や医療機関などで緊急自動車※1の運転を担当する方々を対象にした安全運転研修を定期的に開催している。その一つ「緊急自動車運転ベーシックコース」が3月11日から12日にかけて実施され、7つの企業・団体から15名が受講した。

1日目は緊急自動車における道路交通法の特例をインストラクターが解説し、それに関連する事故の可能性を確認する。そして、受講者がトレーニング車両に乗り込み、急制動や反応制動などを通じて、緊急時であってもゆるやかに減速するための運転について考える。最後は、鈴鹿サーキット国際レーシングコースでのサイレン吹鳴効果検証。救急車のサイレンの音がクルマの車内でどのように聞こえるかを受講者に体験してもらうのである。インストラクターが運転する救急車が受講者の乗る車両に前後左右から接近。エアコンやカーオーディオを使用していない状態と使用している状態で、サイレンの聞こえ方などのように変化するか自分の耳で確かめた。2日目は狭いスペースでの車両誘導からス



赤信号の交差点を通過する時はマイクを使い、歩行者にも注意を促す

タート。緊急時における乗務員間の連携のとり方を訓練するためのもので、障害物が散乱した到着現場を想定した課題。車外にいる助手が指示を出してドライバーがスムーズに寄せられるように誘導する。この後、教室に戻って、緊急走行時における危険予測トレーニング。動画映像を使って、赤信号で交差点に進入する場面や対向車線を走行する場面などで、どのような危険があるかを受講者に答えてもらう。

そして、2日間のまとめとなる模擬緊急走行。2人1組でペアとなり、交通教育センター内の市街地コースを交代しながら緊急自動車に見立てた車両を運転する（それ以外の受講者は一般車両としてコース内を走行）。助手席の受講者はマイクを使って、一般車両役のクルマに指示を出す。途中、原付を運転するインストラクターやコース内を歩くインストラクターが死角から飛び出し、ヒヤリハットする場面をつくり出すなど、本番さながらの訓練となった。「自分が気になった方向だけに意識を向け過ぎないように注意しましょう。行動を起こす前に、落ち着いて周囲を観ることを



救急車のサイレンの音が周囲のクルマの車内ではどのように聞こえるかを体験



混合交通を再現した市街地コースでの模擬緊急走行。赤信号の交差点を安全に通過できるように、ドライバーと助手席が連携し安全確認を行い、助手席の受講者がマイクを使って周囲のクルマなどに指示を出す

忘れないでください。どんなに急いでいても、止まって安全を確認することは無駄な時間ではありません」とインストラクターが強調した。鹿児島県にある米盛病院で今後ドクターカー※2を運転するという受講者は「初めて緊急走行を体験し、運転に集中し過ぎると逆に死角に気が回らなくなるなど、自分の視野が狭くなるのがわかりました。予測できない動きをするバイクや歩行者がいるといった危険を集約した状況での運転を経験できて良かったと思います」と話す。また、三重県津市消防本部で消防車や救急車の運転を担当しているという受講者は「サイレン吹鳴効果検証が

印象に残りました。運転中に音楽やラジオを聴いているドライバーは多いと思います。そうした方々はサイレンが聞こえにくいことがわかったので、一般車両に近づいていく時はサイレンが聞こえていないという前提で対応します」といふ。

同センターではベテラン消防隊員や高速道路のパトロール隊員に向けた「プロフェッショナルコース」も開催している。

※1 消防用自動車、救急用自動車その他の政令で定める自動車で、当該緊急用務のため、政令で定めるところにより、運転中のものをいう（道路交通法第39条）。
※2 病院から医師、看護師が同乗して救急現場に直接出動する車両。



動画映像による緊急走行時の危険予測トレーニング



車両誘導はパイロンで囲まれた中を誘導者の指示に従ってクルマを動かす